

体育科の研究について

福山 央

体育科が目指す「子供が学びをつくる姿」

詳しくは目指す子供の姿シートへ

これまでの3年間の研究を生かし、今年度体育科では「子供が学びをつくる」姿を下記のように設定しました。また、この姿を実現するための支援を整理しました。

【課題設定】

子供の姿 その運動の特性に触れ、自己やチームの強みや弱みを理解する中で、課題を設定したり、調整したりしようとする。そして、共生の視点に立ち、運動やスポーツの多様な楽しみ方を味わい、自己実現に向かう課題を設定しようとする。

支援 これまでの運動経験や生活経験をもとに、課題設定するよう支援する。
運動がもつ特性を大切にした課題を設定するよう支援する。

【課題追究】

子供の姿 課題の解決に向け、試行錯誤を重ねながら考察する。また、自己や他者（教師や仲間）との対話を通して、よりよい解決策を見出ししていく。

支援 個やチームの課題に応じた支援をする。子供が自ら練習やゲームの中で試行錯誤を重ねることのできる、場やルールの工夫や効率的なマネジメントをする。

【パフォーマンス】

子供の姿 練習で取り組んできた成果を基に、ゲームや交流等で表現する。そして、互いに協力したり、自己の役割を果たしたりすることを通して、その運動の楽しさや喜びを味わう。

支援 課題追究にむけた成果を、表現できるよう支援する。
子供が本時の成果、次時に向けての課題へとつながるような振り返りを行う。

これまでの研究を通して、子供が自己をメタ認知する支援によって、子供たちが高いモチベーションを維持し、活動を調整したり目的に応じて選択したりして、主体的に学び続けることが明らかになりました。今年度は、子供が「対象への思いや願い」、「学習方法や取組方」、「自分自身への気付き」に能動的に関与し、調整していく「自己調整」に整理・焦点化して、研究を進めてきました。

体育科研究実践における子供の「自己調整」

詳しくは実践指導案へ

体育科の研究実践「タグトリ王」では、子供の「自己調整」の姿を下記のように構想し、授業実践に取り組みました。

	対象への思いや願い	学習方法や取組方	自分自身への気付き
自己調整の姿	鬼遊びへの思い これまでの経験から、「鬼ごっこ」の楽しかったことやもっとこうだったらいいのという思いをもとに、チームで取り組む鬼ごっこへの視点をつくり出し、共有する。	実現に向けて チームの結果や仲間の話を聞き、「自分がチームのためにできること」「もっとよい方法はないのか」を考えながら練習やゲームに取り組む。	思いや考えの変化、自分への気付き 自分や相手のチームの結果や友達からのアドバイスを受け、攻め方・守り方、自分の役割について再考する。
	・新しい鬼ごっこをやりたい！ ・足が速くなくても活躍したい！ ・チームで協力したらできるかな？	・自分ができることは何だろう？ ・ぼくはこの作戦を試してみよう！ ・もっとたくさん取るにはどうすればいいのかな…。	・チームで協力すると楽しいな！ ・もっといい作戦はないかな？ ・ちがう作戦も試してみよう！

体育科「タグトリ王」研究実践について

研究実践においては、チームで話し合う場面を意図的に増やし、一人一人が自分の考えや思いを表出しながら「自己調整」を促すための支援を行いました。男女のバランスや足の速さなどの運動技能だけでなく、2021年5月実施 hyper-QU「じぶんのこうどうをふりかえるアンケート」の結果と学級での普段の生活をもとに、『友人に対する「配慮」のスキルの方が高い子』、『友人と積極的・能動的にかかわる「かかわり」のスキルの方が高い子』、『「配慮」と「かかわり」両方のスキルの「バランス」がとれて

いる子』に分類し、それをもとにチーム分けをしました。

「配慮」のスキルが高い子は、話し合いや運動に対して遠慮がちにならないよう、教師が意見や活動の一つ一つを適切に価値づけし、背中を押す支援を行いました。一方、「かかわり」が高い子に対しては、意欲的に活動に取り組む反面、相手の意見を聞き入れられなかったり、仲間とぶつかってしまったたりすることが想定されるので、教師が間に入り、どうすればよいのかを具体的に支援していきました。バランスがとれている子に対しては、チームでの様子や、活動への取り組み、本人の困り感に合わせてその都度支援を変えていきました。また、自分やチームの仲間がどの作戦を選択し、どんな動きに取り組んでいるのか可視化するために、チームのホワイトボードを活用しながら活動に取り組みました。(図1)



図1 ホワイトボードを活用した話し合い

このように、チームの特徴や一人一人のタイプに合わせた支援を行い、自らの学習を見つめ、調整していく姿を引き出すことで学びをつくっていきました。

子供の姿から

本実践は、個人の取り組みからチームへの取り組みへ移行し、チームでの活動を通して個が高まるための場の設定を行いました。子供たちは、他者と関わることで自分の動きを少しずつ自覚し、自分の動きの有効性について考えながら活動していました。そのため、徐々に「自分+相手」を意識して活動に取り組むことができるようになり、自分がおとりになってみたり、仲間と連携してタグを取ったりする姿が見られました。また、話し合いの場面では、ネームカードとホワイトボードを活用しながら作戦の有効性について考え、自己決定したり(図2)、授業の時間以外にも集まって話し合ったりする姿が見られました。(図3)



図2 自分たちの作戦を自己決定

hyper-QUの結果をもとにチーム分けを行った結果、普段発言しない子が発言したり、いつも自分の意見を押し通すことが多い子が、相手の意見に耳を傾けたりするなどの成果が見られました。このチーム分けは、戦術学習の話し合いや工夫の基礎を養うという、低学年の段階では有効であったと考えます。しかしながら、中・高学年と学年が上がるにつれ、様々なタイプの子が互いに学び合い、多様な意見が出やすい、従来のチーム分けの方が好ましいと考えられます。



図3 休み時間の様子

今回の実践を通して、どの子も「タグを取る動き」と、「タグを取られないための動き」を身に付けることができました。また、休み時間には教室で過ごすことが多かった子が、休み時間に体育館で友達と鬼ごっこをして遊んでいる姿も見られるようになりました。本実践後、「ボールゲーム」の授業に取り組んだ際には、相手のいないところを狙ったり、隙をついたりする動きが見られたりと、本実践で学習したことを次の学びにつなげる姿も見られました。

研究から見えたこと

この3年間、体育科では「子供が学びをつくる」ために、子供の願いや思いに合った課題、場の設定や活動の保障とともに、子供たち一人一人を見取り、個に応じた適切な支援を大切にしました。(図4)

子供たちは、これまでの経験や自分の体力や技能の程度、性別等にかかわらず、互いの良さを生かして協働し、多様性を尊重したり、自己の役割を果たしたりしながら、学びをつくってきました。

「子供が学びをつくる」ためには、教師の関りが必要不可欠であり、活動を価値付ける声かけや、子供の困り感に寄り添った支援を常に行っていく必要があります。そのためには、教師側が教科や教材の価値を徹底的に分析することが大切であると考えます。



図4 チームや子に応じた支援の様子

子供たちが運動に親しみ、楽しさや喜びを感じられるような授業の実践と、子供たち一人一人の学びの充実を今度一層大切にしていきたいです。